

死刑について考えてみませんか

街に行く皆さん。この近くに東京拘置所があります。

東京拘置所では二千人もの裁判中の被告人たちの他に、二十数名の死刑判決が確定した人たちが生活しています。彼らはどのような日々を過しているのでしょうか。

死刑確定囚は面会や文通もごく限られた家族としかできず、その生活が外部に伝えられる機会は多くありません。同じ死刑確定囚でも、人により、施設により、その処遇はさまざまです。

昨年の暮れに東京拘置所の死刑囚が家族宛に出した手紙をまとめた、『死刑確定中』（太田出版）という本が出版されました。この本には「確定死刑囚の生活」がまとめられており、東京拘置所の場合での、衣食住や、運動、医療の様子などある程度知ることができます。しかし、この本が書かれた後も処遇は変化しています。

東京拘置所では改築工事がはじまっています。完成すれば地上十二階建ての高層建築になるとのことです。『死刑確定中』には拘置所の暑さ寒さはとても過酷なものだと書かれていますが、そういった面での改善はあるのでしょうか。冷暖房設備も備えられるようですが、あてにはなりません。というのは、経費の問題を理由に実際には使用されない可能性が高いからです。現に名古屋拘置所ではかなり前に高層ビルになって、冷暖房設備もあるのですが、一回も使われたことがないそうです。

また、高層建築になったからといって、見晴らしがよくなることもありません。それどころか外がほとんど見えない可能性さえあるのです。現在、工事期間中の仮舎房ができ、『死刑確定中』の著者も今はそこに移っているのですが、その仮舎房の窓はすべて覆われていたのです。あまりの閉塞感にノイローゼを訴える人まで出てきたため、先日、やっと窓の一部を開けましたが、空がほんの少しだけ見られるようになった程度だといいます。

身体を拘束されているだけでストレスがたまる上に、高層化にともなって密閉性が増し、運動も屋内でするようになり、地面に触れる機会もなくなっていくので、長期にわたって収容されている人たちが身体的、精神的にどんな影響を受けるか心配されています。

もうひとつの大きい処遇の変化は昨年十月からなされている身の回り品（服や本や裁判の資料など）の量の制限です。東京拘置所では一人につき、みかん箱にして約二箱半までとなりました。超えている分を減らさないかぎり新たな物品の差入や購入はできないというので、やむをえず多くの所持品が廃棄されています。

死刑囚の場合は裁判が長期になり在監期間も長いことが多く、手もとにおきたい資料も膨大になることが多いので、いっそう深刻な問題になっています。

東京拘置所での処遇の問題についても、いっしょに考えてみませんか？